

第12回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

絹の小風呂敷

森 あき・三重県伊勢市

私が結婚したのは三十七歳の時だった。十二年前の感覚でみるとかなり遅い結婚だったといえる。

夫になる人は四歳年上の優しい人で、私はこれから始まる生活を思い、幸せをかみしめていた。

結納を控えたある日、待ち合わせ場所に現れた彼は「連れていきたい店がある」と言い出した。婚約指輪はもう選んだし、一体なんの店だ？　と思いついていった先にあったのは、呉服屋さんだった。

「結婚する時には、お嫁さんに帯を贈るもんならって」

照れくさそうに言ってお店に入ろうとする彼を、引き止めることも出来ないほど私は驚いていた。

帯って、そんなの初めて聞いたけど？　そもそも私、着物ももってないのに！　嬉しさよりも、ガツカリさせてしまうかも知れないという恐怖に、半分パニック状態のまま慌てて彼の後を追ってお店に入った。初めて入った呉服屋さんの店内は、華やかというか雅やかというか、どこもかしこもキラキラしていた。決して美人でもない私が身につけていいものなど一つもない気がして、途端に気後れしてしまった。

ああ、私なんかがこの人の奥さんになっていいのかな。もっと綺麗で可愛い人が、美しい着物が似合う人が相応しいんじゃないかな。心底そう思っただけで俯いてしまった私の目に、ふわりと何かが飛び込んだ。それは座敷の前の棚に置かれた、小ぶりの風呂敷だった。

ごくごく薄くピンクを含んだ白い地に、色とりどりの小さな鞠と紐の絵が描かれている。絹の滑らかな光沢と、ちりめんの風合いが見るからに柔らかなその風呂敷は、ほんわり光っているように見えた。

「私、これが欲しい」

考えるより先にそう口に出していた。小さな風呂敷とはいえ、正絹で、美しく繊細な文様を考へても決して安いものではないだろう。だけどその時の私に、躊躇は全くなかった。この小風呂敷はこれからの私の人生に絶対必要なものだと思っていた。

突然言い出した私に、彼もお店の人もビックリしていた。帯じゃなくていいの？　これと一緒に買えばいいんじゃない？　と小声で言う彼に、私は笑顔で首をふった。

「これがいい。この風呂敷をもってお嫁にいくよ」

一目惚れではあったけれど、私とて何も考えていなかったわけではない。これからお中元やお歳暮なんかの品をもって義実家を訪問することも増えるだろう。子どもができたらお弁当箱や重箱を包んで行楽にも行くだろう。日常の中で美しい布を使う日々は、きっと素晴らしいものになる。そう思ったのだ。

帯を選ぶつもりだった彼やお店の人には申し訳なかったけれど、私は大いに満足していた。そして喜んでいる私を見て嬉しそうに笑ってくれる彼に、この人と結婚することにして良かったと改めて思った。

そんな小風呂敷だが、実はこれまで、一度も使ったことがない。義実家に手土産をもっていく時は、お店がつけてくれる気の利いた紙袋に入れていくし、子ども連れの行楽には専らプラスチック製のランチボックスと保冷バッグを使っている。絹の小風呂敷で子どもとお出掛けなんて、考えるだけで恐ろしい。それが令和の日常だ。

ではあの小風呂敷が無駄な買い物だったかというところ、全くそうは思わない。折にふれ、件の小風呂敷を『大事なもの入れ』の引き出しから取り出しては、そっと撫でたり眺めたりしている。そこには、結婚生活に絹の小風呂敷が必須だと疑いもなく思っていた頃の私がまっさらなまま残っている。なーんて可愛かったんでしょう、私。苦笑いで見つめながら、ちょうどあの頃夢見た気持ちも、何度でも新鮮に思い出す。明るくて柔らかくて、上等の毎日を夫になるこの人と作るんだと本当の本気で思ったのだ。

白地に飛び跳ねる鞠の絵は、慌ただしい日常のようにも、はしやぐ子ども達の姿にも見える。すでに見慣れた楽しい気な文様は、私に繰り返し大切なことを教えてくれる。掛けがえのないとは、こういうことをいうんだよ、と。